2013年4月15日発行　第25巻第5号（通巻280号）

短歌往来

月刊短歌雑誌

5

MAY 2013

［特集］

水ぬるむ春のうた

作品＝仲宗角十江戸雪十志垣澄幸十小川真理子十田島邦彦十佐藤孝子十伊藤方信十兵頭なぎさ
小橋美沙世十川田茂十光本恵子十藤岡美代子十本阿弥秀雄十王城洋子

巻頭作品――篠弘　特別作品――渡英子＋大辻隆弘
評論――江口別　promising――高木佳子
特別企画　連詩歌の試み――大岡田紀×畑彩子

【特別企画】

連詩歌の試み

畑 彩子

昭和43年（1968年）静岡県生れ、現在東京都在住。「かりん」所属、雨場あき子に師事。
歌集に『東京』『卵-egg-』、イラスト歌集に『東京のアリス』がある。
よみうりカルチャー短歌教室講師。

連詩歌のはじまり

隣町に住んでいる画家で詩人の大岡亜紀さんとは数年前からのランチ友達で、パスタを食べながらの文学談義の最中、詩と短歌の、または絵と短歌のコラボレーションをいつかやりたいね、と話すことがあった。ところがその後、あの大きな震災が起き、惨状やかなしみや後悔を語る言葉にみちあふれた日々の中で、言葉自身の無力さや不確かさを痛感することとなった。東京が震災前の落ち着きを取り戻しつつあっても、崩れてしまった言葉への信頼感はなかなか回復せず、新しい文学の試作品を創ろうとする気持ちが萎んでしまった。

しかし、震災地に住む人たちの震災詠を新聞歌壇で何度も読んだり、震災を題詠として展開されていた「詩歌句の試み」（短歌往来二〇二年十二月号）を読んだりしているうちに、自分の言葉で、自分の立場で、震災後の世界を今までとはちがう形で表現してみたいという気持ちが強くなってきた。そこであらためて、連詩の経験がある亜紀さんをお誘いし、互いに試行錯誤をしつつはじめたのがこの「連詩歌の試み」である。

大岡亜紀

画家、詩人。東京都出身。武蔵野美術大学日本画学科卒業。岩絵の具による抽象絵画を制作。詩集に「新バベルの塔」「ある詩　はじめて」「光のせせらぎ」、訳書に「ビジュアル版伝記シリーズ」の『ミケランジェロ』と『レオナルド・ダ・ヴィンチ』（共訳）。父は詩人の大岡信。

うた縒り合わす愉しみ

現代詩のジャンルのひとつに、複数の詩人で詩句を連ねてゆく、連歌や俳諧に似た「連詩」がある。詩人である私の父が、歌仙を巻いた経験から発想を得て、仲間とともに四十年ほど前に始めたもので、国内外に実践者が増えていった。連衆が歌を寄せ合うという、日本古来の独特な文学形式に父が着目したのは、ともすれば他者から孤立した創作に傾きがちな現代詩への、疑問の投げかけでもあっただろう。

私が初めて連詩を体験したのは数年前、「しずおか連詩の会」で、綴られる詩句が、次の詩句によって違う色合いを帯びてゆくさまに惹かれたものである。その後、短歌と詩で、連歌などの式目も心がけながら作れないか、畑さんに相談した。コンパスなしの航海よろしく、ふたりで試行錯誤の海に漕ぎ出したが、いつわりなく明かせば、これは作者達が真っ先に愉しむ「遊び」である。ただ、文字を追うしばしの間、おかしみを感じるとか、ふと頷いてしまうなど、いささかの了承といった賛意をいただけるなら、おおけないことである。

＊＊連詩歌の試み＊＊

耀う波の巻

畑 彩子×大岡亜紀

一　昇りゆく陽射しをたっぷり含んで
　　朝のこころは　耀う波を産卵する　亜紀

二　この青い森に光が満ちるとき羽化するわれを受け止めてみよ　彩子

三　ドリブルする手に馴染んでいる鼠色
　　突き指に巻いた包帯は真っ白だったのに　亜紀

四　路地裏の猫カフェで友を待つあいだ西風つょく吹き抜けてゆく　彩子

五　つれない返事が海を越えて届く
　　航空郵便料金ほどの重さもなくて　亜紀

六　木の葉浮くプールにゆったり身を沈め昨日見た絵を思い出しつつ　彩子

七　軽やかに　アンドロメダ銀河を泳いでわたってゆく残像
　　あれは　わたしの抜け殻？　それとも希望？　亜紀

八　運命のパンを食べよの声はしてあなたの腕に天使の刺青（タトゥー）　彩子

九　切られた髪がはらはらと　リノリウムの床に散らばって
　　「前髪はどうなさいますか」と　担当美容師がのぞきこむ　亜紀

十　良き薔薇と悪き薔薇とを選り分けるプライズメイドの広すぎる肩　彩子

十一　鳥にも栗鼠にも知られることなく地に落ちて
　　その裔のなき　虫食いの実　亜紀

十二　月に傘、星には霧がかかる夜ただひたすらにピアニカを吹く　彩子

十三　くちびるの使用方法―とがらせる、おしつける、かみしめる、
　　ひそやかな吐息をそっと逃がす……　亜紀

十四　「起立、礼」の掛け声のなき教室で鉛筆削る音だけ響く　彩子

十五　記憶の底に深く深く沈めたんだ　あの歌を
　　だけど俺の弱さはなぜ　浮きあがってくる　亜紀

十六　うらびれた紀の湯通りで鈴虫を買ってあげた子それきり見ない　彩子

十七　わたしはいつも　ここにひとりでいるの
　　だれかを待っているのか　捜されているのか　わからなくて　亜紀

十八　廃船を焚き火に燃やす冬の暮れ饒舌すぎて父はさみしげ　彩子

十九　ひるがえりながら高みを目指せ
　　力尽きる恐れなど　とうに脱ぎ捨てた　亜紀

二十　春雷を聞きつつホットラムを飲み明日行く島の地図をひろげて　彩子

＊　詩は、二行詩を繰り返した。

＊補注＊

一　ふたりで「明るいもの」を題材にと決めた。連歌の「発句」に倣い、挨拶となる詩とした。

二　「陽射し」から光を連想。発句の明るさを引き継ぎながら、物語のはじまりを意識してつくった一首。

三　連歌の「第三」は飛躍する句。心的意味合いの「受け止め」るを、『ボールを受けるバスケット部員』へ転化。

四　バスケット部員が練習後に出かける話題の猫カフェ。そこで彼女らは、意外な素顔を見せるのかもしれない、と連想して。

五　相手に合わせることをしない猫の気性を「つれない」という人もある。

六　遠距離恋愛に疲れた少女が、木の葉のようにプールに浮かんでいる午後。

七　ひと気のない深いプールの底では、こころが時間や空間を越えることさえある。

八　「銀河」から「天」を連想。ほんとうに思いがけない瞬間、天からの啓示を受けたと感じる場面を描きたかった。

九　人生は天の命に左右されるのか。幸運の女神には前髪しかない、というが。

十　前髪を切ったプライズメイドの、結婚式への複雑な気持ちを表した一首。

十一　選り分けられる側に立てば、虫食いの実にも思い入れが湧くというもの。

十二　地面から目をあげて空を見れば、月も星もぼんやりと浮かぶ今宵。

十三　誰に教わらずとも人が、肉体の使い方を違えず感情を表現できる不思議。

十四　礼儀作法をうるさく言わない今の教育現場。とがらせるのは鉛筆だけ？

十五　人間の脳は実は、経験したすべてを記憶しているという。忘れたい歌も、懐かしく響く声も同じように。

十六　「記憶」の「記」から「紀」の字へと変換。

十七　人待ち顔の誰かも本当は、待ち人か尋ね人。自分のなかの子どもが目を凝らす。

十八　「わたし」は朽ち果てたボート。かつては湖の白鳥のように人々に愛されたのに……。

十九　風が煽る火の粉があかあかと舞いあがるように、高みを希求する、ひたぶるごころ。

二十　「高み」から「春雷」へと連想。一、の「陽射し」にも呼応する一首にしたかった。

＊　二〇一二年一月二十一日～三十日　創作

＊＊連詩歌の試み＊＊

砂浜の巻

畑 彩子×大岡亜紀

一　砂浜で城にも墓にも見ゆるもの子らはつくれり歓声あげて　彩子

二　陣とり遊びが果てたなら
太鼓もラッパもひっそり眠る　そして
聴こえなかった囁きが　息をふきかえす　亜紀

三　シースルーエレヴェーターに積まれゆく月光・茶の香・虫のたましい　彩子

四　あの人の住む町にも　そろそろ金木犀が色づくころ　亜紀

五　いつとなく降り出した雨避けながら熟れ過ぎの梨を捨てにゆく朝　彩子

六　靴箱から　ピンヒールのパンプスを選んだ
つま先で昨日を断ち切り
かかと鳴らして　まっすぐ歩いてゆくために　亜紀

七　血と汗と罵声にまみれた女らを愛し続けるこの老い人は　彩子

八　妖精の匙加減しだい　脳内麻薬（エンドルフィン）は薬か毒か　亜紀

九　野分めく風で傾く裏木戸に白き茸はぴっしりと生え　彩子

十　ハンドル切って抜け出すんだ　砂煙の乾燥地帯
はるかなオアシス　追っていかなければ
この身ごと　蜃気楼になるだろう　亜紀

十一　ついにパリに帰り着いたがああ君は子猫に夢中でぼくを見もせず　彩子

十二　窓の下に散らばったスワロフスキー　新しい輝きをまとっている　亜紀

十三　色白の力士はゆったり席を立ち空のグラスをコーラでみたす　彩子

十四　あの日も雪が舞っていた
　ふりほどいて傘から逃げたのは
　もう一度　つかまえてほしかったから　　亜紀

十五　南国の果実のような幼子の手から零れるみるくきゃらめる　　彩子

十六　絵筆で生み出した「かぐわしき大地」に　今なお画家（ゴーガン）は抱かれて　　亜紀

十七　サーカスは今年で終わり　綱渡りするライオンにどうぞ拍手を　　彩子

十八　この道を　ジェルソミーナもザンパノも通っていった
　言葉や肌　目に見えるすべてが違っていても私たち
　たったひとつの場所へ　一緒に向かっている　　亜紀

十九　バスはいつも五分遅れでやってくる　はじめて息子の髭を見た夜も　　彩子

二十　虹をくぐるための切符　にぎりしめた掌すこし汗ばんで　　亜紀

＊　詩は、三行詩と一行詩の順に繰り返した。

＊補注＊

一　旅をテーマに作り始めることに決定し、南国の砂浜のイメージからスタートした。

二　城と墓があるのは戦（いくさ）。戦が果てて蘇るのは、優しさや平和、善きものへの思い。

三　「息をふきかえす」から「たましい」へ。三句目で飛躍を、と考えて場面を都会にした。

四　虫の魂をはこぶ高層ビルの無機的な涼しさは、秋を連れてきた。

五　秋のイメージを踏襲し、さらに晩秋のさみしさを出したかった。

六　ピンヒールのパンプスで出勤するのは、小雨のような憂いを蹴散らすため。

七　「ピンヒール」から格闘技の悪役（ヒール）を連想。

八　愛情も募りすぎれば執着になり、果ては毒にもなる危うさ。

九　ごく身近な場所に、毒もつものが繁殖しているという現状。

十　強風に舞いあがる砂煙。生きるとはオアシスを求めつづけることか。

十一　十、からパリ・ダカール・ラリーの孤独なライダーを連想して。

十二　別れを予感する恋人たち。関係性の終結、そして次のステップへの兆しが輝きだす。

十三　「スワロフスキー」から「グラス」へ、さらにラ音の重なりも意識的に行ってみた。

十四　音のない雪景色。人は思わず、来し方を思い返す。

十五　十四からひきつづき、手の動きをクローズアップしてみた一首。

十六　楽園に憧れ、失意をも得て、タヒチの大地に画家は葬られている。

十七　破天荒な晩年を過ごしたゴーガン（祖国を去りタヒチに暮らし、大作を描きつつも自殺未遂や訴訟騒動を起こした）へのオマージュとしての一首。

十八　「道」はフェリーニの映画のタイトル。それぞれが目指す場所へ、それぞれの道を通ってゆき、同じところへ着くであろう、わたしたち。

十九　この道をいつも五分遅れでやってくるバスに、実は愛着を持っている。

二十　どんな切符なら通れるのだろう。「道」は虹の向こう側へつながっている。

＊　二〇一二年二月十日～二十日　創作

＊＊連詩歌の試み＊＊

ヴァカンスの巻

畑 彩子×大岡亜紀

一　水玉のワンピースに　砂はねあげて走る君
　　素足にからみつく潮の香　汗ばむ季節　亜紀

二　スコールの止んだ夕暮れ　園庭にオオミズアオを埋めている子ら　彩子

三　青白いドラッグシュートで着陸したスペースシャトル
　　ふわふわ　はればれ　翌日も浮いているのは乗組員たち
　　重力にすぐさま慣れた機体の　傷だらけなのは表面だけ？　亜紀

四　タクシーもらくにつかまりソーホーに行く途中でもキスばかりした　彩子

五　気立てのいい野良猫は　観光客にお愛想支払いオヤツに換える　亜紀

六　業務用ライムケーキをぶつけあう大会が終わりお風呂屋に行く　彩子

七　街灯の下　ふたつの影法師
　　重なりそうに離れて　歩いてる　亜紀

八　敬虔な教徒が暴徒になりうることも私は知らずおとなになった　彩子

九　お客さま　当店は初めてでいらっしゃいますか？
　　近視で世界がぼやけたら　乱視で世界がゆがんだら
　　お好みで選べますとも　逆さ眼鏡もバラ色の眼鏡も　亜紀

十　高飛びしたピエロと踊り子見つからずいつも通りの水曜の朝　彩子

十一　地球でたった一ヶ所　陽の光が聖火に変わるオリンピア　亜紀

十二　この嘘を信じてもいい信じないほうがいいなら信じなくていい　彩子

十三　プラシーボ効果かもねと　笑って応じた照れ隠し
　　どこかで願ってもいる奇跡の存在　ルルドの泉　亜紀

十四　独身にもどった僕を祝うためXYZをそう、もう一杯　彩子

十五　暗渠が途切れるたび　上水は空と木立ちを映し出す
闇のなか　水はよどみなく進んできた
ひとも　いつだってとどまらず流れている　亜紀

十六　ここ人形博物館ではお静かに　赤ちゃん人形が寝ていますから　彩子

十七　ぐうきゅるるる　お昼抜かなきゃよかったラブシーンの映画館　亜紀

十八　年老いた王子の再婚相手には未亡人（ウィドー）がいいそれも赤毛の　彩子

十九　トゲのある　わがままなバラに惹かれてしまう　不思議
わがままを　俺だけに言うとなればなお愛しい　不思議　亜紀

二十　今ここで待たない待てない待ってはいけない　割れた酒瓶　錆びついた鍵（キー）　彩子

二十一　私を懸命に探しても　追うほど輪郭が薄れるだろう
迷路をうろつくお前を尻目に　当の私はぐるり地球を一周

お前の後ろにいたりするのに――　人は私を「真実」と呼ぶ　亜紀

二十二　友逝きぬ　葬儀の朝は風強く「Let it be」きれぎれに聴こゆ　彩子

二十三　あなたに似ていてもあなたではない　人いきれのスクランブル交差点　亜紀

二十四　渋谷では月があまりに遠すぎて滑り落ちるように朝来る　彩子

二十五　つかめそうでつかめないなら目を凝らすのに
つかんだつもりなら目を離して逃がしてしまう　亜紀

二十六　蝙蝠が飛ぶ夕焼けを見に行こう　自転車はぼくがずっと漕ぐから　彩子

二十七　森の寝息　忙しい蜜蜂　まぶしい木洩れ日　野原をおおうレンゲ
庭の犬も鳥かごの鳥も　いつか恋人たちも　消えてゆくために
永遠を刻むこの一瞬のページに連なりながら　生きている　亜紀

二十八　七人の陽気な男が歌いつつ仙台銀座へビールを運ぶ　彩子

二十九　姫さまの口からぽろり毒りんご　よみがえる鼓動　まばゆい光　　亜紀

三十　草の葉を耳に押しあて立ち止まる　ほらね、水の音が聞こえる　　彩子

＊　詩は、二行詩、三行詩、一行詩の順に繰り返した。

＊補注＊

一　今回は、まず私がタイトルを決め、畑さんにはそれを知らせないで制作していく、という方法をとった。ゴールデンウィークの頃に始めたので「ヴァカンス」をテーマとしたが、気の早い脳裏に浮かんだのは、夏の波音と潮の香り。

二　春先に亡くなった友人を思い返しながら歩いていた園庭で、ふいに現われたオオミズアオ。それはまるで、友のたましいのように思えた。

三　青白いドラッグシュートで着陸したスペースシャトル。地球に帰還した乗組員たちの会見の場は、高揚した雰囲気に包まれる。宇宙生活の苦労や楽しみ、帰還したときの喜びが、メディアを介して多くの人に伝わっていく。それに比して、彼らの身体と精神を宇宙線から護り通したシャトルが、主役として語られることは少ない。もし機体に、人間が理解できる言葉と感情があるなら、果たしてどんな感想を話してくれるのか、訊いてみたいと思うことがある。

五　ギリシャのある島の光景。食事どきになると、観光客のテーブルを目指し、あちらこちらから野良猫がやってきては、人の膝にそっと片手を乗せてみたり、愛らしい声で短く鳴いてみせたりする。魚の切れ端を与える代わりに、猫から前払いでお愛想（お勘定）をもらうようなものか。そのしぐさを見て、何もやらずにいられる観光客は少なかった。まさしく「雲は身を助く」である。

八　人の影の部分にあるのが宗教なのか、光の部分にあるのが宗教なのか。宗教問題が日々激化している現代社会では、影も光も混沌として判別できない。

十　映画のようなドラマチックな恋の話をひとつ入れたかった。ピエロと踊り子のくみ合わせは、中世ヨーロッパの王国の宮廷に召し抱えられた、華やかで哀れな芸人たちの物語にインスパイアされて。ちょうど、十、という区切りなので、転調させて別世界に飛ばしたいという気持ちもあった。

十一　五月十日、古代オリンピック発祥の地であるオリンピアで、夏に開催されるロンドンオリンピックの聖火が灯された。凹面反射鏡で太陽光線を集めて点火するという。神が創造した光から採られた、神に捧げる「聖なる火」。

十三　奇跡が起きると言われる聖地は少なくない。科学的見地からは怪しくても、病が癒された人にとっては、治った実感そのものが一番の証拠。打ちひしがれている者には、治りたい、癒されたいと願う心の強さを持てる対象こそが奇跡であり、祈りが深ければ、おのずと内なる癒しが呼び起こされても不思議ではない。

十四　願いがかなってやっと離婚できた「僕」。カクテル「XYZ」は「最高」という意味があるが、その最高の一杯を飲んでしまったら、そのあとはいったいどうなるのだろう。もしかして、「最悪」の結末が待ち受けているのかもしれない。

十八　「クイーン」というイギリス映画に着想を得た一首。チャールズ皇太子は、男としてどうしようもない部分があると思うのだが、なんとなく同情もしてしまう不思議な存在。

十九　「年老いた王子」も昔は、「星の王子さま」のような子供だっただろうか。どこにでもありそうなバラや、さして珍しくはない火山でも、自分にとっては真に大切なものだと悟り、彼らが待つ星に「星の王子さま」は還っていった。王子の理解に達するまでに、私たちの心は、どれほど長い旅をするだろう。

二十　現況を変えたい、現況から脱したいという願望から生まれた一首。上句は、十二、だけでは言い足りなかった部分でもあり、福島の原発問題に対する政府のあいまいな対応に関しての揶揄でもある。下句は、荒れ果

てしまった人の心や大地の様子を比喩したつもりだったが、やや美意識が勝ち過ぎた表現だったかもしれない。二十、という区切りなので、流れを変えることも意識した。

二十二　友の死後、挽歌をつくるような気分にはなれなかったが、こういう形でうたをつくってきて自分の中で言葉や感情が自然にほぐれてきた感じがあり、思い切って葬儀当日のことを詠んでみた。葬儀場で実際には「Let it go」は流れていなかったが、私の心の中ではこの歌がずっと流れていた。

二十三　世の中にどれだけたくさんの人がいても、みんな「この世にたった一人しかいない、その人」である。「その人」を失う悲しみは、ほかの人の存在では埋められない。なぜなら、その「ほかの人」も、たった一人しかいない「その人」だから。そしてまた、自分自身も然り。

二十四　ハチ公前のスクランブル交差点を眺めていると、急いでいる人が多いな、とつくづく思う。高校生、カップル、サラリーマン、コスプレした少女たち、だれもかれもがわき目もふらずに前に進み続け、うすっぺらな看板のようにかがやく満月に気づく人はいない。

二十八　二十七、の明るい風景を受けて、また自分の気持ちとしても光を感じられるものを詠みたかったので、東北地方の復興の兆しを一首に表現した。

二十九　白雪姫は仮死からよみがえったが、わたしたちの世界が多く内包する毒りんごは果たして、ぽろりと口から落ちてくれるだろうか。落ちるのを待つだけでは何も変わらない、そこが現実とおとぎ話との大きな違い。だが、もうひとつ違いがある。おとぎ話は完結しているが、現実は未来に向かって変えられる。

三十　再生への希望を最後の一首に籠めたかった。震災からの再生、自分の気持ちの再生、そして未来へ向かうことの一歩を記したかった。「水」は、一、にも通じるキーワードであり、今回の三十連を通して感じる「流れ」ではないかと思う。「生」の象徴である「草の葉」は、私の好きなアメリカの詩人、ホイットマンに敬意を表して。

＊　二〇一二年四月三十日～六月四日　創作